



TITLE:

<学生の声> 「インターンシップの すすめ」

AUTHOR(S):

原島, 純

CITATION:

原島, 純. <学生の声> 「インターンシップのすすめ」 . Cue 2010, 24: 58-58

ISSUE DATE:

2010-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/145906>

RIGHT:

学生の声

「インターンシップのすすめ」

情報学研究科 知能情報学専攻 言語メディア分野 黒橋研究室 博士後期課程2年 原 島 純

この「学生の声」、博士課程の方が順番に寄稿を依頼されているそうです。「今回は情報学研究科の方に」ということで、私に順番が回ってきました。せっかく「情報学研究科の方に」ということなので、私が所属する情報学研究科知能情報学専攻に特徴的な制度について紹介し、その中で推奨されているインターンシップについてお話したいと思います。

知能情報学専攻には、修士一回生のとき、どこかの企業にインターンシップに行かなければならないという制度があります。行かなければ「特殊研究」という必須単位が取得できません（正確にはインターンシップに行かなくても「特殊研究」を取る手段はありますが）。インターンシップは応募等の手続きが面倒ですし、一ヶ月程度本業から離れなければならないというデメリットがあります。しかし実際にインターンシップに行ってみると、デメリットを大きく上回るメリットがあることが分かります。

まず、インターンシップなので当然ですが、就業経験を詰めるというのは大きなメリットです。何時に出社して何時に退社するという社会人としての生活はもちろん、企業の雰囲気などは実際に行ってみないと分からないと思います。またインターンシップに来ている他の大学の学生と交流できるということのも大きなメリットだと思います。同じ業種に興味がある同世代の学生と交流するのは大きな刺激になります。さらに、企業によってはお給料まで貰えることもあります。このようにインターンシップにはたくさんのメリットがあります。

知能情報学専攻のほとんどの学生は、制度上どこかの企業にインターンシップに行きます。一方工学研究科にはこのような制度はなく、インターンシップに行く学生も少ないと聞いています。しかし、上で述べたようなたくさんのメリットもあるので、修士をとって就職される予定の方はもちろん、博士に進学することを決めている方も、インターンシップに行くことを一度検討してみてもいいのではないでしょうか。

「宇治・エネ科での暮らしを紹介します」

エネルギー科学研究科 エネルギー変換科学専攻 長崎研究室
博士後期課程1年（2009年10月進学） 金城 良太

宇治キャンパスは、京阪・JRまで徒歩5分以内にある上、徒歩で通える場所に住むところがたくさんあります（しかも坂はありません）。また自転車で5分圏内にコンビニ3、スーパー3、ホームセンター（実験部品が急に必要になったときに重宝）も揃っています。

学生が多くないためか、一つのテーマ（装置）が一人に割り当てられることが多いです。一人で何でも取り組むことで研究者としての成長ができますし、研究の面白さがよくわかると思います。僕も高温超伝導バルク磁石を用いた新型放射光発生装置の研究というチャレンジングなテーマに取り組んでいます。専用の実験室で、実験装置の設計をしたり、アルミ材を加工して真空チャンバーの架台を組み立てたり、磁場計測用のホール素子を動かすモーターの駆動回路をFETを組み合わせで作ったり、液体窒素循環用の配管をしたり、ソレノイド用の300 A ケーブルを天井に敷設したり、流行のGPGPUを使って超伝導磁石の磁場シミュレーションをするプログラムを作ったり、何でも自分で時には研究室の仲間や先生の助けを借りてやります。さすがに超伝導体の焼結には失敗し（それでも磁石片は浮きました！）、専門家から提供して頂いています。

外国人も多く、研究会や他研究室とのミーティングは英語ですが、厳しくはなく、わからなければ聞き直してもいいし、やっぱりわからなければ先生が日本語で教えてくれます。日本語混じりの拙い英語でもみんな我慢強く聞いてくれます。それでも、研究室配属当初は全く英語ができなかった後輩達がみるみる成長し、驚かされるぐらいです。

研究内容は、ほかの京都大学の研究室と同じく世界最先端を行っており、B4から研究している学生はほとんどM1で国際会議に出ますし、博士課程の学生は学振特別研究員として多く採用されています。